

メディア漬けの子どもたち

6月は待ちに待ったサッカーのドイツワールドカップが始まります。野球のWBC同様に眠れない日が続きそうです。はっきりしない天候の変化もありますが、体調にはくれぐれも気をつけましょう。

さて先日、「沖縄県小児保健学会」に参加する機会がありました。そこで「人間になれない子どもたち—メディア漬けと子どもの危機—」というテーマの特別講演がありました。(清川輝基氏:NPO法人 子どもとメディア代表理事)その中で印象深かった事を書いてみたいと思います。

最近、毎日のように子どもたちに関わる殺人事件のニュースがあります。どこでどんな事件であったのか、日が経つにつれて忘れてしまうほど、次から次に新しい事件が勃発しています。幼児を駐車場の建物から突き落としたとか、同級生の女の子の首をカッターで切ったとか、パチンコに夢中になり、車中の乳児を熱中症にしたとか・・・。

清川氏は、これらの事件はテレビ、ビデオ、ケイタイ、漫画、インターネットなどメディア環境に深く関わりがあると分析しています。こうすれば人は傷付く、死んでしまう、そういう事をする^{と自分はどうなる・・・}という思考過程が欠如しているのだと言います。

テレビを見ている時の脳波と読書や会話をしている脳波では活動場所が全く違います。テレビでは視覚中枢の後頭葉が主に働き、善悪を判断する前頭葉はほとんど機能していないことが分かっています。その点読書や会話においては、前頭葉が活発に働いているのが脳生理学で証明されています。

従って、テレビ漬け(メディア漬け)が今日の事件多発に大いに関係していると言います。言葉の訓練が出来ていないため、言葉で説明する前にすぐ手が出てしまう「**新しいタイプの言葉遅れ**」、外遊びが少なく、家でファミコンに明け暮れる「**人間関係がつかれない子どもたち**」が急増しているという事です。乳幼児で表情がない、言葉が遅い、視線が合わないなど特徴的な症状の子供たちが増えているようですが、将来が心配です。

一日中テレビをつければなしの生活、テレビやビデオに子守をさせていませんか?このようにメディア漬けが、子どもの発達障害である「**テレビ・ビデオ育児症候群**」につながり、今日のような事件と深く関わっているのではないかと危惧しているのです。

文部科学省が提唱している「**早寝早起き朝ご飯、テレビを消して外遊び**」は、一昔前には当たり前でしたが、その習慣が今やほとんど崩れてきています。清川氏は、その習慣の復活こそが将来を担う子どもたちを健全に育成していく根本的課題だと捉えています。



親子・家族のふれ合いをもっともっと増やすこと、皆さん!「**2歳まではテレビを消してみませんか?**」
(たまなほ)

